慶應義塾医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

# 第89回慶應医学会総会開催

## 8名が三四会奨励賞を受賞

平成21年11月13日、慶應義塾大学病院新棟11回大会議室において第89回慶應医学会総会が開催された。

末松誠会長による物故者への黙祷により総会が開始され、庶務報告が末松会長より行われた。また、岡田保典会計担当理事、熊井浩一郎監査より会計報告がなされた後、末松会長より予算（案）、事業計画（案）がなされ、承認された。

総会に次いで、三四会奨励賞授与式が行われ、比企三四会長より、8名の受賞者に表彰状と副賞が渡された。

本年度は臨床医学分野から3名、基礎医学分野から5名の三四会員が受賞したが、地域医療、社会貢献分野からの受賞者はなかった。しかしながら、基礎医学分野において5名もの受賞者があったということは、慶應医学の研究分野の充実ぶりを示すもので、今後の発展も大いに期待できる。

医学会総会と併せて開催されたシンポジウムの様子と、受賞者からのコメントは次号12月号で掲載する予定。

授与式にて。後列が受賞した8名

### 臨床医学分野

**1．小野 政徳**（産婦79回）
Side population in human uterine myometrium displays phenotypic and functional characteristics of myometrial stem cells

**2．岩丸 有史**（外74回）
Silencing mammalian target of rapamycin signaling by small interfering RNA enhances rapamycin-induced autophagy in malignant glioma cells

**3．植田　良**（外76回）
Identification of HILA-A2- and A24-restricted T-cell epitopes derived fromSOX6 expressed in glioma stem cells for immunotherapy

### 基礎医学分野

**1．家田 真樹**（内74回）
心臓病の基礎研究

**2．田中 謙二**（精76回）
Mice with altered myelin proteolipid protein gene expression display cognitive deficits accompanied by abnormal neuron-glia interactions and decreased conduction velocities.

**3．神山　淳**（生81回）
中枢神経系細胞の分化可塑性を制御する分子機構の解明

**4．日方 智宏**（整79回）
PIAS3 negatively regulated RANKL-mediated osteoclastogenesis directly in osteoclast precursors and indirectly via osteoblasts.

**5．齋藤 康一郎**（耳74回）
頭頸部疾患に対する遺伝子治療に関する一連の研究

## 2009年秋の褒章・叙勲

### 塾医学部からは4名が受章

日本政府は11月2日に褒賞を、11月3日に叙勲受章者を発表した。慶應義塾大学医学部からは、大学院医学研究科委員長の岡野栄之君（生理学教授　62回）が紫綬褒章を受章した他、3名の褒章・叙勲があった。

紫綬褒章は学術、芸術、スポーツ分野の功労者に授与される褒章。藍綬（らんじゅ）褒章は「公衆の利益を興し成績著明なる者又は公同の事務に勤勉し労効顕著なる者」に授与される。

旭日章は国家または公共に対し功労がある者の内、功績の内容に着目し、顕著な功績を挙げた者に授与される勲章。

瑞宝章は「国家または公共に対し功労があり、公務等に長年従事し、成績を挙げた者」を叙勲対象とし、主に長年公務員を務めた者や、公共事業に於いて功労のあった者に授与される。

この度の褒賞・叙勲受章者からのコメントは、12月号で掲載する予定。

【2009年秋の褒章】

**紫綬褒章**
岡野栄之（生62回）〈神経科学研究功績〉
現　慶應義塾大学医学部教授・大学院医学研究科委員長

**藍綬褒章**
田中　義（内53回）〈保健衛生功績〉
現　㈳群馬県医師会理事

【2009年秋の叙勲】

**旭日中綬章**
山本修三（外38回）〈保健衛生功労〉
現　㈳日本病院会会長・慶應義塾評議員・慶應連合三田会常議員

**瑞宝小綬章**
掛川暉夫（外33回）〈教育研究功労〉
久留米大学名誉教授
現　慶應義塾大学医学部客員教授

## テキサス大学MDアンダーソンがんセンターおよび聖路加国際病院と協定締結

聖路加国際病院チャペルでの署名式（9／12）

2009年10月12日、慶應義塾大学医学部と米国テキサス大学（The University of Texas）MDアンダーソンがんセンター（以下MDA：MD Anderson Cancer Center・President John Mendelsohn教授）および聖路加国際病院は、研究協力に関する学部間協定を締結した。聖路加国際病院内チャペルで行われた署名式には、末松誠学部長および武田純三病院長が出席し、また、2007年のがん対策基本法施行に伴い活動をスタートしたがんプロフェッショナル養成プログラムメンバーの慶應、聖路加双方の教授陣や医師及び若手研究者が多く参列した。本協定は、池田康夫学部長の時代より、佐谷秀行教授が中心となって、臨床ワークショップや研究協力を重ねた結果実現したもので、医学部にとって、今後のがん研究、医療の発展に向けて大いなる原動力となるものである。

当日は、署名式に先立ち、『明日のがん医療を担うプロフェッショナルの人材育成　日米コラボレーションの推進に向けて』と題し、一般公開のシンポジウムが開催された。MDAのProvost and Executive Vice PresidentのRaymond Dubois教授が、医療におけるコミュニケーションの重要性、MDAでは医学教育にコミュニケーションが盛り込まれていること、メンターシステムの仕組み、現場での成功例、などについてプレゼンテーションを行うと、続くパネルディスカッションでは、「リーダーの育成」にテーマを絞り、1、日本で根付いている、先輩を見て育つことによるコミュニケーション能力のばらつき、2、予算の不足（国家予算の削減、充分とはいえない寄付）、3、科を超えたディスカッションの難しさ（時間不足、経験が多い人の意見が強い）などが、課題として確認された。会場からも、現役医師、患者団体の代表、患者の方々からの率直な質問や意見などが次々と出され、非常に活発な意見交換となった。シンポジウムに引き続き、がんプロフェッショナル養成プランでの教育プログラムを受講した若手医師たちがDuBois教授および上野T.直人教授（MDA、慶應義塾大学客員教授）と直接対話をするミーティングも開催され、参加者にとって、大いに刺激を受けた1日となった。

また翌13日には、MDAの一行が信濃町キャンパスを訪問し、改めて、慶應医学部の実績、臨床・研究・教育体制、将来に向けての構想などを理解して頂く機会を得た。本協定の締結により、トランスレーショナルリサーチを核として、研究者や学生の相互派遣、個々の研究プロジェクトにおける協力など、多面的な交流が期待されている。

信濃町キャンパス訪問（9／13）

医局を訪問するDr. DuBois（9／13）

## 慶應・咸臨丸プロジェクトから初のテニュア研究者が誕生

本医学部では、文部科学省科学技術振興調整費「若手研究者の自立的研究環境整備促進」事業の支援により、若手独立支援テニュアトラック・プログラム『「細胞と代謝」の基盤研究を担う若手育成』（慶應・咸臨丸プロジェクト）が平成20年度より発足した。テニュア・トラック制とは、若手研究者が、任期付きの雇用形態で自立した研究者としての経験を積み、厳格な審査を経てより安定的な研究職を得るしくみのことである。本プロジェクトでは、国際公募により選抜された博士学位取得後概ね10年以内の若手研究者に対し、名実ともに独立したテニュア・ポジションの獲得へ向けた様々な支援を行う。これにより、5年のプロジェクト期間内で、世界へと飛躍する優秀な独立研究者を輩出するシステムの構築を目指す。本学では初年度、学外委員3名を含む選考委員会での審査を経て、応募総数98名の中から特別研究准教授3名・同講師10名を採用した。13名の若手研究者は、スタートアップ資金・年度毎の研究費のほか、研究スペース、研究補助者の人件費等の支援を受け、またアドバイザー教員や関連する既存研究室から人的物的支援を受けつつ、精力的な研究活動を推進している。

この度、この咸臨丸プロジェクトから初のテニュア研究者が誕生した。2009年11月1日付けをもって、咸臨丸プロジェクト特別研究講師から東京医科歯科大学脳統合機能研究センター独立准教授に赴任した味岡逸樹氏である。准教授ではあるがセンター内での独立性は保証されており、正式な「味岡研究室」が誕生することになった。

味岡氏は、大学院までは東京工業大学生命理工の赤池敏宏教授の研究室で肝臓再生の研究に携わり、筆頭筆者として複数の論文を発表した。その後、東京慈恵会医科大学DNA医学研究所分子神経生物学研究部門（仲嶋一範部門長・当時）に日本学術振興会特別研究員（PD）として参加、その後2002年からは助手として本医学部解剖学教室（仲嶋研）に勤務した。以後約3年間にわたり、神経解剖学及び肉眼解剖学の学生実習及び関連する献体業務等を担当しながら活発な研究活動を続けた。その間、斬新なアプローチと正確な実験手法とを駆使して脳の発生機構の解明に取り組み、大脳皮質の各層を構成する神経細胞群が最終配置前に選択的凝集機構を獲得することなどを明らかにした。2005年には米国セント・ジュード小児研究病院のMichael Dyer博士の研究室に留学し、マウス網膜を研究対象として、「最終分化を終えた神経細胞が脱分化することなく増殖しうる」という歴史的な発見をして注目された。本年3月に咸臨丸プロジェクト特別研究講師として解剖学教室に帰室してからは、研究者としての自立のための支援を受けながら、「網膜桿体細胞分化におけるRbのエピジェネティクス」というテーマで精力的に研究活動を行ってきた。

味岡氏は、以上のように節目節目で研究分野を大きく変えながら、それぞれにおいて重要な意義ある成果を発表してきており、研究者としての能力の高さが窺われる。また、後進の教育にも大変熱心であり、今後味岡氏の下に多くの若い研究者が集い、育っていくことが期待される。「咸臨丸」初のテニュア研究者として、新天地でのますますの発展を祈りたい。

（仲嶋一範　解剖67回）

## 研究環境の整備加速

### 医学部、競争的資金獲得にて躍進

現在、塾医学部の競争的研究費獲得状況は大変調子が良い。例えば、博士課程の学生のサポートを中心としたグローバルCOEプログラムが2件採択されている。末松誠医学部長がリーダーとなっている「In vivoヒト代謝システム生物学拠点」と岡野栄之研究科委員長がリーダーの「幹細胞医学のための教育研究拠点」である。また、博士課程修了後の進路をサポートすることを目的としたMEBIOS（「イノベーション創出若手研究人材養成」PhD躍動メディカルサイエンス人材育成）プログラムや、修士課程の学生を対象とした大学院教育改革支援プログラム（薬学研究科と共同）も採択されており、大学院全体として大変幅の広いサポート体制が整っている。

これらのプログラムにより、多くの大学院生がより研究しやすい環境が整えられたこと、それぞれの研究プロジェクトが相乗作用によりさらに推進されたことは間違いない。一方、個々の研究プロジェクトを対象とした大型研究プロジェクトも多数採択されている。内閣府主導の「最先端研究開発プログラム」に岡野研究科委員長のプロジェクト「心を生み出す神経基盤の遺伝学的解析の戦略的展開」が、つい最近採択された。また、今回紹介させていただく末松医学部長のERATOプロジェクト（JST）も毎年数件しか採択されない大型研究費プロジェクトの一つである。更に現在医学部内でCRESTプロジェクト（JST）が4件、その他年間研究費3000万円以上のプロジェクトが15採択されている。塾医学部の規模から考えると、おそらくその比率は日本トップといっても過言でない。

これらのプロジェクトの相乗作用によりより活発な研究環境が整備され、塾医学部から著しい研究成果が世界に発信され続けていくことが期待される。今後の更なる展開が楽しみである。

## ERATO選出

### 「末松ガスバイオロジープロジェクト」

科学技術振興機構（JST）の平成21年度戦略的創造研究推進事業（総括実施型研究：ERATO）の研究総括に末松誠教授（医化62回）が選出された。ERATOは研究総括のイニシアチブの下に多様なバックグラウンドを持つ若手研究者が結集して新しい科学技術の源流を創出することを目的として独創的な探索研究を推進する競争的大型研究費（年間約3億円、5カ年）であり、新しい革新的技術の創出によって研究のための予算計画を年度毎に柔軟に変更することのできるユニークな仕組みである。

「末松ガスバイオロジープロジェクト」は「代謝調節機構解析に基づく細胞機能制御に関する基盤技術の創出」を戦略目標としてこの10月から発足した。ガス分子（$O_2$、NO、CO、$H_2S$、$CO_2$など）は、地球の太古における単細胞生物が外界の環境変化を感知する信号として利用してきたことが知られている。哺乳類においてもこれらの分子群はストレス応答に伴うエネルギー代謝や組織の修復などの制御に使われ、その生体内濃度・受容・分配の異常が各種疾患に関与していることが示唆される。本研究領域は、ガス分子が関与する生物の代謝制御機構を解明し、これを基盤として細胞機能の新規制御技術を創出するとともにその医療への応用を図ることによって、ガス分子による生体制御の医生物学＝ガスバイオロジーを開拓しようとするものである。

ガス分子は金属中心を有する「補欠分子族」と呼ばれる複合体に配位結合する性質があり、そのような複合体を持つ生体高分子は代謝システムに散在する酵素群に属するため、これらの分子は強力な代謝制御物質として働く可能性がある。しかし生体内でのガス分子の作用の実体や正常・病態での生物作用の違いについては多くの謎が残されている。ナノバイオテクノロジーを用いたガス受容体の系統的探索や、メタボローム解析技術、代謝物の分子質量イメージング技術などの先端技術開発を駆使しながら未知の領域に踏み込む研究を推進する予定である。

これまで三四会員では御子柴克彦博士（48回　理化学研究所）の「御子柴細胞制御プロジェクト」（1995年）、宮脇敦史博士（66回　理化学研究所）の「宮脇生命時空間情報プロジェクト」（2006年）が採択されたが、塾医学部・医学研究科での受け入れは初めてである。

## 2009年　連合三田会開催

本年は10月18日、「150年を経て、伝えよう未来へ！慶應イズム」という開催ステートメントで、麻生泰大会実行委員長（1969年法学部卒）のもとに開催された。本年は150年という節目の次の年にあたり、余韻と感動を残しつつも新たな気持ちを込めたいという思いで開催ステートメントが考えられた。この慶應イズムとは、創立150周年を経て今後「慶應らしさ」をもった新たな歴史を作っていきたいという思いである。当日は好天にも恵まれうららかな秋の陽射しの中多くの来場者で日吉キャンパスがにぎわった。三四会としては塾内における医学部・三四会のアイデンティティの向上と会員相互の親睦を目的として、活動事業の一つとして2007年度よりこの大会に参加している。

今回は新校舎の独立館D204教室を割り当てられた。昨年同様藤沢三田会との相部屋であったが、昨年までと比べ並木道に近くなり、教室も新校舎で近代的かつ充分なスペースが確保され、当日は大会開門と同時に正門付近で幟を掲げた村井副会長、松本理事の誘導により多くの三四会員が第4校舎独立館D202教室に集いにぎわった。

今後三四会として会員が集う場を提供するだけでなく講演会の開催や地域三田会との連携などより積極的な大会への参加を検討していきたいと考えている。

最後に毎年のことながら連合三田会当番学年の三四会員と日吉の保健管理センターの皆様には、荷物の搬送、後片付け等で大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

【参加三四会会員】
内匠昭（33）比企能樹（37）横山譲太郎（39）福田純也（40）櫻井秀也（41）土方允久（42）山田淑儿（42）吉野肇一（44）近藤脩（45）村井勝（46）菅沼安嬉子（47）池田康夫（47）池田美智子（47）小林剛（48）佐藤忠彦（48）林奐彦（48）宮地清光（48）森川征（48）中谷比呂樹（52）松本純夫（52）戸山芳昭（54）末岡瑠美子（57相当）相川厚（58）岡本真一郎（58）中村貴（58）渡辺勲史（58）末岡浩（59）リー啓子（60）末松誠（62）古梶清和（63）渡辺真純（64）中川種昭（64相当）深川和己（68）渡辺完治（68）涌井昌俊（68）林忍（72）河村朗夫（73）茂松次郎昌幸（74）川崎健太（90）

（古梶清和　外63回）

## 鑑往知来

「百聞は一見に如かず」というが、地方の1日に車が数百台しか通らないような道路を作って本当に必要なのかという議論をTVで見るとなるほどと思っていた。だが、いま自分がその地方に住んでみるとその考えは逆転した。「道路こそ命綱である」ことが身にしみた。道路がなければ、人・ものすべての流れが停滞し孤立する。それで？と思う人は、食糧自給率を上げろという資格はない。岩手県でも多くの農産物・海産物は、そうした村や町から生み出される。そこに生産者がいなければ、確実に食料自給率は低下する。彼らがその地で生活するためには、何が必要であろうか？高齢者が多いその地域には医療施設が必要なのはよくわかる。実際に需要も多い。しかし、急速に深刻化する医療崩壊は、その地から勤務医を奪っていった。その地に開業医がいると、開業医は患者が増えることを喜ばず、患者の多さに悲鳴を上げる。あふれた患者は最後のよりどころとして、大学や大病院を目指す。中央都市部であればそれらの波は分散され意識されることもないであろう。だが、地方ではその波はボディーブローのように勤務医の体力を奪う。いつ開業医が倒れるか、勤務医が燃え尽きるか、そんなに遠くない気がする。唯一つの救いは、新入医局員である。であるが、近年医師数が過剰だと誤報道されている眼科では、ついに本年度の日本全体で眼科研修を開始した人数は、昨年より25％減少し250名となり初期臨床研修医制度発足前の400名超の時代の6割にまで減少した。多くの地方で入局者は1、2名程度である。人口予想によればここ10年で65歳以上の人口は、25％程度急速に増加し、患者増は確実でさらに事態は悪化するであろう。医学部定員が増加されたが、仮にそれが有効であったとして、各科に医師が回り始めるまでに地方の医療の崩壊は決定的となってしまうのではないだろうか。

（黒坂大次郎　岩手医科大学眼科教授　66回）